様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　３月３１日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010　～　2012
課題番号：２２７１０２５６
研究課題名（和文）　フィリピンにおけるムスリム女性のネットワーキングとジェンダーの現代的諸相
研究課題名（英文）　Contemporary Situations of Muslim Women’s Networking and Gender in the Philippines
研究代表者
渡邉　暁子（WATANABE AKIKO）
東洋大学・社会学部・助教
研究者番号：70553684

研究成果の概要（和文）：本研究は、マニラ・ムスリム社会の政治、経済、宗教に焦点をあて、多民族および多宗教的状況におけるムスリム女性のネットワーキングの現代的諸相を把握し、その活動が当該社会の性差におよぼす影響を明らかにすることを試みた。3 つの側面からみたとき、政治分野では、特に民族ムスリムが中心となって活動する傾向が強かったのに対し、経済活動や宗教活動では、イスラーム改宗女性の活躍が顕著であった。それぞれが歩んできた背景は異なるが、彼女たちの活動は互いに可視的であり、コミュニティに暮らす女性たちに影響を及ぼしている。多民族・多宗教状況にあるからこそ、女性の生の多様性がコミュニティに認められ、社会を動かしていく力になっている。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to understand the contemporary aspects of networking of Muslim women in the multi-religious and multi-ethnic situation in Metro Manila, by focusing on their political, economic and religious activities, and to examine the effect of the their activities on the gender of the society. When viewed from these three dimensions, ethnic Muslims tend to play a central role in the political field, while presence of Muslim converts was remarkable in religious and economic activities. Though each of them has different backgrounds, the activities of women are visible to each other in the community. In such multi-ethnic and multi-religious situations, diversity of women’s lives was observed in the community, and has led to dynamism in the society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：　複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：フィリピン、ムスリム、女性、ネットワーキング、ジェンダー、都市部、改宗、通婚

１．研究開始当初の背景

従来、国際労働移動研究は送出国と受入国との関係にのみ焦点を当て、国内移動と国際移動の結節点の役割を看過してきた。フィリピンにおいては 1970 年代に始まった労働力輸出政策により、人々は世界の諸都市と結びついた。国内のマイノリティであるムスリムにとって、それはむしろアラブ諸国に特化した結びつきの強化であり、また、これまで経済・教育移動の最終目的地であったマニラは、海外就労の中継地の役割をも担うようになった。そうした人の移動に伴って郷里と海外の文化や実践が持ち込まれた結果、マニラのムスリム社会は、故地の規範、主流社会の価値観、中東寄りのイスラームの教義が交錯・並存する場となった。このような状況に対し、今日のマニラ・ムスリム研究は端緒についたばかりである。

研究代表者は過去の調査研究を通じて、グローバルなムスリム・ネットワークとマニラにおけるムスリム・コミュニティ形成との関連、ムスリムとキリスト教徒との日常的な交渉や関係、都市マイノリティとしてのムスリムの自己表象の戦略といったものを、フィリピン国家をとりまくマクロな社会経済状況の変化との相互作用のなかで分析してきた。そのなかで、高等教育を受けたムスリム女性が学生組織をつくり活用していたことも明らかにし、海外就労を経験したムスリム女性がマイクロファイナンスを活発に運用していること、イスラーム勉強会で学ぶ女性たちが「イスラームの理想とする女性」について積極的な議論を行っていることを考察してきた。

そこで気づいたのは、キリスト教徒が多数派をしめるマニラにおいて、またグローバル化のなかで、故地の文化や伝統を相対化し、それに距離をおこうとする、フィリピンのローカルタームでいうところの「プラクティカル」な実践がムスリム女性の間にも増え続けている点であった。こうした個人主義的・現状肯定的な行動様式の増加を憂慮する一部の女性たちは、ムスリム女性間の関係を緊密化することで抵抗している。これらに参加する女性たちの活動は少数ながら前衛的であり、ともすれば「西洋化」するマニラ・ムスリム社会の政治、経済、宗教の領域において自らの位置の再確認をしている。研究代表者がこの一次資料を土台として行う本研究は、ジェンダーに関わる先行研究の知見をふまえ、ムスリム女性の結合の在りかたとその歴史的過程、及びその今日的諸相を記述し、分析することであった。

今日のフィリピン・ムスリム女性は、政治、経済、教育の場面での活躍がめざましい。これは、ミンダナオ紛争を契機とする女性の活動領域の拡大や 1980 年代以降の世界的な「移住労働の女性化」の影響が大きい。だが、そのような女性が活躍する場の多極化・多元化は、他方で伝統的規範と中東寄りのイスラーム主義、先述の「プラクティカル」などの新たな行動規範の間に緊張関係を生み出している。これらの規範の対立・共存のメカニズムを考察することが現代のフィリピン・ムスリム社会、ひいては東南アジアのムスリム社会の理解につながると確信している。

２．研究の目的

本研究の目的は、マニラ・ムスリム社会の政治、経済、宗教に焦点をあて、多民族および多宗教的状況、さらには多教育状況におけるムスリム女性のネットワーキングの現代的諸相を把握するとともに、その活動が当該社会の性差におよぼす影響を明らかにすることである。また、ミンダナオや東南アジアのムスリム社会との比較研究を通して、フィリピン及びマニラのムスリムにおける女性の結合とジェンダー関係のありかたを分析し、その特徴と意義を解明することである。

具体的には、マニラのムスリム・コミュニティを対象に、(1) 世俗的な高等教育を受けたムスリム女性の政治活動、(2) 海外就労を経験したムスリム女性の経済活動、(3) イスラーム勉強会に参加しているムスリム女性の宗教活動の、政治・経済・宗教の 3 つの領域におけるムスリム女性のネットワークとジェンダーを分析する。

また、上記で明らかになった事項をマニラの特徴として検討するため、研究代表者はミンダナオ地方のサンボアンガ市にて調査をおこなう。ここはムスリム三大民族集団のひとつ、タウスグのホームランドである。この地方都市において、ムスリム女性のネットワーキングと、それによるジェンダー構成を考察することで、マニラという多民族・多宗教状況ならびに多教育状況、加えて郷里からの分離という社会・心理的状況がもたらすムスリム女性の結合の特色と限界を探る。

３．研究の方法

フィリピンにおける調査研究(約 3 ヶ月)、湾岸諸国における調査研究・研究交流（約 2 ヶ月)、そして日本における調査研究・研究交流等（2 年強）をおこなった。このうちフィリピンにおいては、研究代表者がこれまで研究を進めてきたマニラのムスリム・コミュニティ、及びミンダナオ地方にて現地調査を実施した。調査方法は、タガログ語による聞き取り、直接観察、アンケートの計 3 手法をもちい、それらを文献調査によって跡付けた。

４．研究成果

上述した具体的な研究計画について、それぞれの研究成果を記す。

(1)「ムスリム女性の政治活動」に関する研究計画は、研究代表者がこれまで行ってきた研究の追跡調査である。研究代表者は、過去の調査研究で、マニラで世俗的な高等教育を受けたムスリム女性たちの政治活動におけるネットワーキングを明らかにしてきた。そこで気づいたのは、1990 年から 97 年にかけて、マニラを拠点とするムスリム組織の活動が、調査地の女性の組織化を促進させた点である。調査地は、かつて男性年長者がリーダーシップをとり、住民は伝統的なイスラーム的規範を共有していた。こうした社会で解明すべき点は、①「ムスリム女性」として社会内の男女の序列に抵触しないためにいかなる工夫がされたのか、②住民は若い女性がリーダーシップをとることに対してどのような反応をしたのか、である。

そこで、研究代表者は、組織の広報誌や新聞等の文献資料を収集した。そのうえで、当時のムスリム女性活動家や街頭集会に動員された人々など 5 名から土地紛争に関するオーラルヒストリーを聞き取った。その内容は、政治活動（参加の頻度、活動内容、幹部メンバーへの推薦の有無）、ネットワーキング（参加動機、伝手［紹介者、被紹介者の有無、その関係］他）、ジェンダー（女性のリーダーシップについての是非）などである。

現在は廃刊となってしまったが、マニラで勉学に従事するムスリムの若者を中心に『スアラ・カバタアン』というニュースレターが 1992 年から発行され、マニラのムスリム・コミュニティにて無料で配布されていた。『スアラ・カバタアン』とは、タガログ語およびアラビア語を混ぜた用語で『若者の声』という意味である。主として、学生やムスリム知識人の見識が記事として載せられている。内容としては、その時々の政治とフィリピン・ムスリムとの関係、イスラームと自分との生活、フィリピンのムスリム女性としてどう生きるべきかをつづったものである。

これらの編集者・発行者となった女性とはどのような人物だったのか。『スアラ・カバタアン』のバックナンバーの収集と共に、編集者として名を連ねた方たちにコンタクトをとると、「ムスリム青年学生組織」(MYSA) という左派系の学生運動に従事しているグループが中心であることがわかった。その幹部のなかに今回の調査協力者となった女性たちがいた。彼女たちは 2 人ともマラナオ人の貴族層出身で、マニラで法学・マスコミュニケーション学を修めた者たちである。ニュースレターの資金源は、彼女たちと同じ民族のビジネスマン、あるいは親族のツテ、もしくは自身の両親に頼んで得られたものである。

この点からみても明らかなように、当時の女性による政治活動は、主として、貴族層で高学歴の女性たちに限られており、自身のソーシャル・キャピタルにもとづいて活動が展開されていた。ただ、後に下院議員となったヤカン人男性のハタマン氏が語るように、この幹部の女性たちは決して自らがリーダーにならなかった。横で支えながら、ムスリム社会の改革をうながそうとした。それというのも、彼女たちは伝統を重んじる貴族層出身であり、仮にムスリム女性がリーダーになったとき、年長者たちの不興を買い、フィリピン・ムスリム社会の改革をうまくやっていけないのではないかと危惧したからである。

MYSA の活動やその組織構成は、その後、「ムスリム青年専門職者」(YMP) として発展した。現在ではマギンダナオ人で平民出身の女性がリーダーシップをにぎっている。彼女がいかにしてムスリム組織のリーダーとして活動しているのか、また、年長者からの不満をいかにかわし、説得しているのか。このことについて同氏への聞き取りをおこなった。すると自身の熱意と、男性をないがしろにしない態度から、賛同してくれる方が出てきたと語ってくれた。しかしながら、より多くの周辺人物、また MYSA や YMP の一般メンバー（活動を休止した人も含める）への聞き取りをおこなうことで、包括的な考察することが今後の課題として残る。

女性の政治活動は、自身のライフステージにも相互影響をあたえる。ムスリム女性は結婚すると「母」としての役割を大きく期待される。独身や子供がいない間は政治的な活動ができたとしても、結婚し、実際に子育てをするにあたって、そうした時間をとることができない。そのため、自分の役割を政治活動・社会奉仕活動に重点を置く女性たちは 30 代になっても結婚しない。あるいは結婚したとしても、子どもをつくらずに活動にいそしむ。従来、ムスリム女性は比較的早くに結婚し多産であった。そうしたムスリム女性像の異なる側面を、政治活動・社会奉仕活動に従事する女性たちは提供した。

(2)：「ムスリム女性の経済活動」に関する研究計画では、2 つの調査を行った。第一は、キリスト教系 NGO「フィリピン小規模金融開発財団」(PMDF) による貸付事業の参加者グループを対象に考察した。参加者の多くは、初等教育のみを受け、海外就労を経てマニラで世帯をもったムスリム女性である。この活動は 2001 年に始まり、今では平均 60 人以上の多様な民族集団の女性が毎週の会合に参加している。彼女らは、海外就労を繰り返さずに家にいることを選択し、なおかつ主たる生計者になることを避けることによってイスラームに準じている。

研究代表者は、毎週水曜日の PMDF 会合に参加し、その内容を観察した。また、約 50

名の成員のなかから、経済活動（参加の頻度、ローンの使用目的、商売の収支、返済のためのやりくり）とネットワーキング（参加動機、伝手［紹介者、被紹介者の有無、その関係］他）について聞き取り調査を実施した。

PMDF の会合では、25～40 人の女性たちが参集していた。民族としては、タウスグ人やマギンダナオ人、イスラーム改宗者が多いようだった。PMDF は 5 人が一組となり、それぞれ小さな事業を行いながらローンを払っていくのだが、週ごとの会合には必ず参加しなければならない。調査期間中、新たに 2 名の女性が参加した。女性たちが民族名を聞かれ答えると、担当の女性は同じ民族グループに彼女たちを割り振った。どの民族であるかを知ることは、新規参加者のグループ分けに重要な意味を果たすのであろう。それは、同じ言語を使用するということに加え、女性たちの互いの距離が、他の民族に比べて近いためである。

PMDF に参加していたタウスグ人のなかには、参加理由について以下のように述べた。「私たちフィリピン人女性はがんばっています。PMDF を理解していない人は、これを『5-6（ファイブシックス）』（高利貸し）と同じだと考えています。実際は違います。5-6 は 30 日間で 20%の金利を払わなければなりません。PMDF では 6 カ月の間に小さな金利を払います。継続して払うから、規律正しくなります。もし、お金が自分のであれば、『まあいいや、私のお金だから（なくなっても仕方がない）』と考えるかもしれませんが、それが自分のでなかったら、他人から借りたお金を返すのにがんばらなければならない。（田舎に暮らす人びとのように）『なまけもの』ではだめなのです」と。

このように、都市生活者として女性たちは、マイクロファイナンスを活用していた。そもそも PMDF をムスリム・コミュニティに導入したのは、イスラーム改宗者である。ここにも、金銭にだらしない「なまけもの」ではなく、精を出して家計をやりくりし、きちんと自分を律する者として、PMDF に参加する女性たちを引っ張っていた。

ムスリム女性の経済活動に関する第二の調査は、マニラにおけるムスリム外貨交換業の歴史的な軌跡をたどるものである。

フィリピンにおけるムスリムは、マニラを海外渡航のための中間点とする者と、マニラで商業に従事する者とに二分される。前者は、主として中東・湾岸諸国への出稼ぎであり、フィリピン・ムスリムのなかでも、マギンダナオ人、タウスグ人、ヤカン人に多い。一方、マニラでの商業従事者は、露天商やショッピングモールのテナントとして、海賊版 DVD や貴金属、携帯電話アクセサリなどの小売業に従事している。これらは主としてマラナオ人が同族で商業空間を独占する傾向にある。マラナオ人自身、「商人になって初めて一人前になる」と考えるほどである。このため、マニラでの商業従事者イコールマラナオ人という図式があてはまる。

しかし、ムスリムであっても、マラナオ人が参入していない商業分野がマニラにはある。それが、外貨交換業である。マニラ市の商業地区であるエルミタおよびマラテでは、外貨交換業にムスリムのサマ人女性が多く携わっている。この一帯の外貨交換業店舗でのサマ人女性のプレゼンスが高いのか、マラナオ人がなぜ参入しなかったのか。

そこで、研究代表者は、サマ人の外貨交換業の生活史を知るべく調査を行った。その結果、サマ人の 3 つの親族が主として、外貨交換業に従事していることがわかった。A 一族、K 一族、S 一族である。彼らのパイオニアが「もうかる職業」と始めたが、現金を扱うために、信頼できる人だけしか従業員に置くことができない。そのために、基本的には親族が従業員となる。かれらもまた、数年で独立するようになる。そのとき、もちこまれる紙幣が、偽札ではないのか、使われているものなのか、それとも、換金できるものなのか、見分ける必要がある。そうした知識の伝達が行われきた。

20 世紀の初めよりマラテおよびエルミタ地区は、外国人向けの歓楽街であった。その後、観光スポットとなり、多くのホテルが点在するようになった。それに加え、80 年代から海外に向けた人材派遣業が急増した。こうした状況により、観光客だけでなく、そこで商売を営む者にとっても、外貨交換が必要となった。このため、ホテルの周囲を中心に外貨交換業の店舗が出店した。A、K、S 一族の店も、２つの地区における全店舗の 6 割を占めるようになった。なお、サマ人たちは排他的に交換業に従事している訳ではなく、他のキリスト教徒の外貨交換業と親しくなって婚姻関係を結んだり、第 2 世代がキリスト教徒と結婚することで、非ムスリムのサマ人が登場したり、柔軟な動きを見せていることがわかった。サマ人がこうして商業に従事し、第 2 世代の教育に資金を投じたことにより、第 2 世代は大学を卒業することができ、公務員として安定した職を得ることができている。ただ、そうした安定した職についたとしても、給料の安さから、社会ネットワークのある外貨交換業に再度転身するケースもみられるであった。

（3）:「ムスリム女性の宗教活動」に関する研究計画を遂行した。ここで注目するのは、タァリムという女性のイスラーム布教活動グループの活動である。2004 年に 3 名の女性によって設立され、毎週土曜日の勉強会には

70 人ほどが参加する。タァリムの参加者は民族的にも多岐に渡るが、イスラームという名の下で互いに集う。勉強会では、「いかにして正しくムスリム女性として生きるか」が議論され、日常での実践が促される。研究代表者は、調査地で開かれる勉強会に参加し、説法や会話内容の観察、及び定期的な参加者の確認を行う。勉強会とは別の時間に、10 人ほどのコアメンバーと不定期参加のメンバーに対し、聞き取りを行った。その内容は、宗教活動（参加の頻度、他）、ネットワーキング（参加動機、伝手、タァリム参加以降の周囲との関係性）、ジェンダー（「ムスリム女性が理想とする母および妻の姿」への実現方法や現実との葛藤について）などである。

インド発祥のタブリーグは、イスラームの預言者ムハンマドの言行録であるハディースをもとにしたイスラーム改革復興運動集団である。もっぱら男性の活動としてみられているが、女性の活動もある。女性はハディースを使った勉強会の活動が主である。

首都マニラでは、キアポ地区のムスリム集住区で日曜日ごとに勉強会がおこなわれていた。その参加者がケソン市のムスリム・コミュニティでも開催するようになったのは 2002 年以降である。始めたのは民族ムスリムを夫にもつ改宗者の女性である。こちらも毎週日曜日の午前 8 時から 11 時まで数十名の女性が集まり、ハディースの内容を諳んじたり、男性のイスラーム知識人の説教を敷居越しに聴いたりする。男性と同様に経済的な余裕のある者はクルジ（布教の旅）に赴き、寝床を提供してくれるタブリーグ女性の家で眠る。クルジは 5 人以上で行動することが定められており、共に寝食することで仲間との付き合いが深まり、家族や親族より親密な関係を築いていく。タァリムにおける女性たちのネットワーキングは民族に立脚しない。参加者の民族属性多岐に渡る。ここでは、親族や同郷、言語民族集団というよりも、同じタァリム参加者としての絆がつくられている。その主たる要因は、タァリムへの没入度が高い人ほど、服装が保守的なものへと変化していくからである。

こうした女性たちの活動を、ムスリム・コミュニティにいる人たちはどのようにみているのかというと、「裕福であればしてみたい」という意見もあるが、「サウジアラビアの格好を真似ているだけ」「(タブリーグの)夫に従順なだけ」と否定的なものが多い。しかしながら、参加者は増えているようである。この背景には、改宗女性の増加、およびその活躍がある。そこで、研究代表者は、改宗女性が主として改宗した場所、すなわち海外就労先の湾岸諸国において調査をおこなった。

イスラーム改宗者の集う場としてのイスラミック・センターは，UAE ではイスラーム問題・慈善活動庁，カタルではイスラーム宗教局といったように，湾岸アラブ諸国の政府の管轄下にあるダアワ教育支援施設である。ここでは，イスラームに関心を持つ異教徒，新規入信者，生まれながらのムスリムを対象として，イスラームの普及をめざしている。

具体的には、礼拝の作法、イスラームの教え、聖典クルアーンとハディースの内容の説明、アラビア語の文法・会話などを教えている。アラブ首長国連邦のうち、ドバイやシャルジャなどいくつかの国々に支部がある。どの国の人たちにも開放されており、インド人、パキスタン人、中国人、ロシア人などもいるが、2011 年の新聞記事に、本センターにおいてイスラームに改宗した者の過半数をフィリピン人が占めているという報告があったほど、フィリピン人の学習者が多い。

現地の休日にあたる金曜日のクラスは、およそ 100 名のフィリピン人男女が参加する。このクラスではタガログ語が教授言語であり、男女の「教員」もフィリピン人改宗者である。事務スタッフにもフィリピン人が雇用されており、かれらのほとんどは、ここのセンターで学び、適任者として認められ、前職を辞めて常勤の職員となった者たちである。

センター長の話では、改宗女性がセンターで学ぶ理由は、主として夫がムスリムであること、ほかに、イスラームについて知識を深めることで自身の義務や権利について知ることができること、男性よりも女性の方が一般的に信仰心が篤いということ、男性は、飲酒や喫煙などの悪習から脱するのが難しく、その点は女性の方がイスラームの教えを順守しやすいことが挙げられた。これらの女性の職業は、モールなどの販売員、事務員、家事労働者などである。

3 度の渡航による調査期間中、実際に改宗女性約 25 名に話を聞くことができた。夫がムスリムである者が 5 人、ほかはシングルマザーや独身者である。彼女たちの語りのなかで常に言及されるのが、「私はキリスト教（カトリック）であったときから、教義について疑問を持っていた」という「告白」である。その疑問が、就労先の湾岸のムスリム国で過ごすなかで大きくなり、雇用主や友人からイスラームについて知識を得る機会が増え、やがて「これこそ私が考えていたものだ」と改宗する。また、これと同時に「(改宗前の)当時、私は多くの問題を抱えていたが、改宗することでそれらの問題がなくなった」という語りも共通して登場した。

こうした改宗の経緯を経済的理由から分析することもできる。現在でこそ行われていないが、かつて入信者に対してセンターは支援金を与えていたことがあった。これは、改宗するよう信仰心を買収するものではない。イスラームでは、ザカート（義務的喜捨）の

配分対象としていくつかを挙げている。貧者、ザカートの分配を行う者、新たな入信者、奴隷、負債のある者、アッラーの道のために努力している者（兵士・学生）、旅行者である。このため、入信者に金銭が提供されていた。以前、改宗しないかと話を持ちかけられたフィリピン人男性によると、ドバイでは、イスラームに改宗すれば金銭がもらえると言われて入信したフィリピン人男性も少なからずおり、そうした者は、“filus boy”（filus とは、現地の最小通貨の複数形、「小銭狙いの者」）と陰で呼ばれたという。在外フィリピン人就労者が抱える「問題」の多くは、家族からの無心など、金銭に関わることである。それらを改宗することで解消したが、「金で魂を売った」と陰口を叩かれるのを回避し、自身を正当化するために、跡付け的に「キリスト教」への懐疑を言及するのだろう。

しかし、改宗の背景は一義的ではない。その経済的・文化的状況をより深く知る必要がある。フィリピン人就労女性は、湾岸諸国において永住者となることはできない。仕事がなくなれば本国に帰還せざるを得ない。ビザを発行する権利をもつスポンサーの心次第で未来が代わりうる、法的に保証されていない不安定な状況、周囲が非合法な行動をする中で自身の善悪の価値観が揺るがされる状況、どれほど長く滞在していても外国人で非ムスリムであるかぎり、「外部者」として扱われる状況にある。現地になじむため、自身の立ち位置を確保するため、彼女たちはイスラームに改宗する。「私が改宗したとき、みな喜んでくれた。うれしかった」という語りから、この土地で一定の期間、「地に足を着けて」生きていくことを選んだ女性たちの模索する姿が現れている。

以上、政治・経済・宗教活動の 3 つの側面からみたとき、政治分野では、特に民族ムスリムが中心となって活動する傾向が強かったのに対し、経済活動や宗教活動では、イスラーム改宗女性の活躍が顕著であった。それぞれが歩んできた背景――階層、改宗の経緯、ライフステージの違い、活動に参与したきっかけ――は異なるが、彼女たちの活動は互いに可視的であり、コミュニティに暮らす女性たちに影響を及ぼしている。こうした多民族・多宗教状況にあるからこそ、女性の生の多様性がコミュニティに認められ、社会を動かしていく力になっているのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①渡邉暁子、「マニラにおけるサマ人両替商の歴史的過程」『白山人類学』査読有、15 巻、2012、111-121.

〔学会発表〕（計 4 件）
①渡邉暁子、「イスラーム世界と人々の移動から東南アジア研究を考える」第 88 回東南アジア史学会研究大会（東京：上智大学）2012 年 12 月 8 日～9 日.
②渡邉暁子、「湾岸諸国におけるフィリピン人女性移動労働者のイスラーム改宗」第 17 回フィリピン研究会全国フォーラム（京都：京都大学）2012 年 7 月 14 日～15 日.
③渡邉暁子、「マニラのムスリム・コミュニティに生きる人びと――フィリピンの都市マイノリティにおける連帯と分断」白山人類学研究会 2011 年度第 6 回研究会（東京：東洋大学）2011 年 12 月 19 日.

〔図書〕（計 1 件）
①渡邉暁子、「海外就労するマニラのムスリム女性の生活戦略」ポーリン　ケント・北原淳（編）「紛争解決――グローバル化・地域・文化」（アフラシア叢書第 3 巻）ミネルヴァ書房、2010、pp.202-226.

６．研究組織
(1)研究代表者
渡邉　暁子（WATANABE AKIKO）
東洋大学・社会学部・助教
研究者番号：70553684

(2)研究分担者（0）

(3)連携研究者（0）